**〈冒頭〉**

本日は職業奉仕を中心に、その歴史と変遷を振り返っていきたいと思います。

**〈P2〉**

職業奉仕の歴史は、ロータリークラブの歴史と重なる部分が多いですが、重要項目と人物を中心に、これを年表式に表してみました。

創立期の5年

展開期の10年

やや混乱した成長期の15年

そして、四つのテストの誕生以降の約20年間

最後に、ここ約30年の近年

です。

それでは、順に見ていきたいと思います。

〈P3〉**創立期　「親睦」と「奉仕」**

皆さんもご存じの通り、ロータリークラブは、1905年、シカゴの青年弁護士ポール・ハリスが「友情とビジネスを混ぜ合わせたら、友情もビジネスも増えるのではないか」というアイデアをもとにして、3人の友人と語り合って発足させたと言われています。

当初、会員を一業種一人に制限し、これがロータリーの職業分類制度の始まりと言われています。

この職業分類制度によって、会員は2つの責務を負うことになります。

一つめは**「クラブに対しては自己の職業の代表者という責務」**、

もう一つは**「ロータリアン以外の人に対しては、日常の仕事を通してロータリー精神を普及する責務」**です。この二つの責務が職業奉仕の基礎となっています。

**創立時は「親睦」団体**だったのですが、やがて**「奉仕」も行うクラブに変わっていき**ます。

そのきっかけが、1906年に入会した**ドナルド・カーター**です。入会にあたり、「奉仕」の考え方を持ち込み、クラブ**定款を改正**し、「親睦」と「奉仕」が融合したクラブとなりました。

〈P4〉**展開期　ロータリーの二大標語**

（シェルドン）

ロータリーの発足後しばらくして、ロータリーの目的や存在理由について疑問を持つ人が出始めました。そして、**ロータリーの新しい理想を考え、それを明確にするために委員会が設置**されました。そこで**委員長に任命されたのが、アーサー・フレデリック・シェルドン**です。

彼は、1902年にシカゴでビジネススクールを設立し、サービス理念を盛り込んだ経営学を教えていました。当時のシカゴの商取引は「騙すより騙されたほうが悪い」「法さえ犯さなければ何をやっても良い」というような**荒廃した職業モラルも無い状態**でした。そんな中でも、**モラルを維持**して発展している商店や会社があり、**その共通店が「Service」**という事でした。

1910年、最初の全米ロータリー大会がシカゴで開かれ、全米ロータリー連合会が結成されました。

そしてこの大会の閉会時に、シェルドンが語った中にこの言葉があり、今ではロータリークラブの標語となっています。

**最もよく奉仕する者、最も多く報いられる』（He profits most who serves best）**

（コリンズ）

また、この大会の最終日に**ミネアポリスロータリークラブの会長**、**ベンジャミン・フランクリン・コリンズ**が、**自分のクラブで採用し、厳守してきた原則**は「**Service not Self**（無私の奉仕）」であり、これによってクラブを組織し、新しい会員にもこの精神を学ばせるのがよいと述べました。

この標語も参加者の賛同を得たのですが、のちに、**人は皆、自己を尊（たっと）ぶこと、そして自己を守ることが必要**である。それならば自己を**否定するnotよりも自己を第二に置くabove**の方がよいのではないか！ということで、「**Service above Self**（超我の奉仕）」に修正されました。

〈P5〉**展開期-2　奉仕の理想**

（ロータリーの目的）

どのような組織（企業や団体等）にも、その**目的あるいは目標**が必要です。

全米ロータリー連合会は、**1912年に「ロータリーの目的」**を定めました。これはその後、時代と共に変更が繰り返され現在に至っています。**その対象は、自らの事業のみならず社会生活にわたっています。**

（ロータリーの倫理訓）

**アーサー・フレデリック・シェルドンらの努力によって、ロータリー活動の基本は「自分の職業を通しての奉仕である」という「ロータリーの根本原理」が定着しました。**職業奉仕は、ロータリアン一人一人が**例会に出席**して、他の会員との**交流・親睦を通して**モラルを高め、**日常の生活では自分の職業に真剣に取り組み、社員はもとより仕入先や顧客など周囲の人達のモラルを向上させて、業界の手本となり、その業界のモラルを向上させていくことです。**

この職業奉仕の基本理念は1915年のサンフランシスコ大会で**ロータリーの倫理訓（道徳律）**というかたちで表現されることとなりました。

ただ、残念なことに、宗教色が強い部分があったこと、その内容の厳しさもあり、1951年ロータリーのあらゆる文書から姿を消すことになりました。（新約聖書におさめられた4つの福音書の一つである「マタイ伝」からの引用が見られた）

このようにして、ロータリーの倫理訓（道徳律）は姿を消すことになったのですが、その内容は**職業奉仕の根本原理を表すものとしてその復活を望む声も多く**、**1989年、RI理事会**はロータリーの倫理訓に代わるものとして、「**職業宣言」を採択**することになります。

〈P6〉**成長期　理念派VS実践派**

**ロータリー活動の基本**はロータリアンが毎週の**例会に出席**して、**奉仕の心を学び**、それを通して**親睦を深め**、さらに**奉仕の心を深め**、充実させていくところにあります。例会出席によって形成された**奉仕の心はロータリアン個人**がそれぞれの**家庭、地域社会、国際社会で実践に移す**ことになります。

1910年代に入って、このようなクラブとしての実践を伴わないロータリーの理念に飽き足らず、クラブとしての金銭的奉仕や身体的奉仕の実践をも積極的にするべきであるという動きが顕著になってきました。

　実践派の先頭に立ったのは、**身体障害児の保護、教育に貢献してきたエドガーアレン**でした。1922年のロサンゼルス大会に**身体障害児救済事業に関する決議案を共同提案**として提出しました。

理事会はこれを受けて、**この事業を奨励する決議22-17を採択**しました。これにより実践派の動きはますます活発になり、**「ロータリー創立の理念を守るべき」というシェルドンを中心とする理念派との対立が深まり**、ロータリーは分裂の危機に瀕します。

〈P7〉**成長期-2　決議23-34**

　国際ロータリー理事会は、**両派の考え方を調和させると共に**、従来からある、**いろいろな奉仕の考え方や行動を整理、調和させるための努力**を繰り返していきます。そして、**1923年のセントルイス国際大会**で**、決議23-34が採択**され、論戦の終止符が打たれ、対立は解消しました。

決議23-34は、国際ロータリー並びにロータリークラブの未来の指針として**綱領に基づく諸活動に関するロータリーの方針を明確に表すために提案**されたものであり、**ロータリーの綱領に基づくすべての活動の指針**であると同時に、**ロータリーの奉仕理念を表す唯一の文書**でもあります。

さらに、**この決議で忘れてならないことは、第4条で個人にも、クラブにも、奉仕の理念に基づく実践が求められている**ことを述べたうえで、**第6条ｇ項に、ロータリーの奉仕活動の実践は個人奉仕が原則であって、クラブが行う奉仕活動は会員の訓練のための例示に過ぎない**ことが明記されていて、奉仕の実践は、個人奉仕か団体奉仕かという論争に終止符が打たれていることです。

〈Ｐ8〉四つのテスト　**四大奉仕と四つのテスト**

（職業奉仕）

**ロータリーの四大奉仕**、すなわち、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の考え方は1927年ベルギーのオステンドで開かれた国際大会で決められたものです。

このとき、それまでロータリークラブの基本理念として「**一般奉仕概念」**と呼ばれていたものに、**「Vocational Service（職業奉仕）」**という呼び名が正式に与えられました。

（四つのテスト）

**ロータリーの哲学を端的に表現**し、**職業奉仕の理念の実行に役立つ**ものとして、皆さんもよくご存じの**「四つのテスト」**があります。これは、ハーバート・J・テーラーが1932年の世界大恐慌時に考えたもので、**商取引の公正さを測る尺度**として活用されてきました。

彼は、破産の危機に瀕していた「クラブ・アルミニウム製品株式会社」の再建を任され、その時、育成の指針として会社の従業員が使えるような倫理上の尺度として作られたのが、**「四つのテスト」**です。

　その後、**1954年に「四つのテスト」の版権はRIに寄贈**されることになります。

（様々な宗教を信仰している幹部等に確認し、各宗教の教義に反しないように作られている。）

〈P9～10〉**直近30年　ロータリーの樹**

（職業奉仕に関する声明）

1987年、国際ロータリーは40年ぶりに職業奉仕に関する特別委員会を招集しました。その審議の結果、職業奉仕における新方針として採択され、**「ロータリアンの職業宣言」**が採択されたのと同じ1989年に**「職業奉仕に関する声明」**として決議されました。

この声明は、**個人奉仕を主とする従来の「職業奉仕」の理念を基礎とする**ものであることが分かります。ただ、「会員個人が行う職業奉仕に加え、クラブも職業奉仕活動を行わなければならない」と規定したと解釈できないこともなく、個人奉仕か団体奉仕かという点について、若干の混乱を招いいたと言われています。

（ロータリーの樹）

「ロータリーの樹」はロータリーの職業奉仕を理解する最も良い資料と思われます。これは、2008年RI国際協議会の全体会議において、渡辺好政RI理事が「ロータリーの樹・2008」と銘打ってロータリーを「一本の樹」に例えて、ロータリーの奉仕活動における職業奉仕の位置づけを行いながら、「ロータリーにおける職業奉仕の重要性について」の講演を行った時のものを一部修正し、シカゴにおいて開催された2013年RI規定審議会の審議を経て採択されたものです。

「根」にあたるところが「クラブ奉仕（例会出席等）」であり、そこから職業奉仕である「幹」に水と栄養を送ります。果実として「社会奉仕」「国際奉仕」等が実ります。

つまり「社会奉仕」や「国際奉仕」等を実践していくために、職業奉仕たる「幹」が折れたりしないように、継続性を持って自分の事業を実践、発展させていかなければなりません。

〈Ｐ11〉直近　**「職業奉仕」はロータリーの根幹？**

**2016年の規定審議会**で、「奉仕の第二部門を改正する件」が採択されました。**職業奉仕部門においては、「自己の職業上の手腕を、社会の問題やニーズに役立てるため、クラブが開発したプロジェクトに応えることが含まれる」**という決議が採択されたました。

すなわち職業奉仕部門は、**奉仕の理念を研究する「内なる人づくり」**と**対外的な奉仕活動の「外なる人づくり（外向きの職業奉仕）」**という2つの要素に区分して考える必要が出てきました（「相互扶助」の外部への拡張）。

この決議の採択によって、理念だけでなく、他の奉仕部門と同様に実践（外なる人づくり的な行事）も大切であることが明確化されました。